

愚者の夜

青野 聰



愚者の夜

青野 聰

1979

文藝春秋版

略歴

昭和十八年東京に生まる。
早稲田大学文学部演劇専修
を中退。フランスに遊学、
帰国後フリーライターとな
る。昭和五十三年『母と子
の契約』を発表、芥川賞候
補となる。昭和五十四年、
『愚者の夜』で第八十一回芥
川賞を受賞。著書として、
『天地報道』『さまよえる日
本人とオレンジ色の海』
『母と子の契約』がある。

愚者の夜

六八〇円

昭和五十四年八月三十日 第一刷
昭和五十四年十一月十五日 第四刷

著者

青野 聡 あおの さとし

発行者

杉村友一

発行所

株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話(〇三)二六五一一二二一

印刷所

凸版印刷

製本所

大口製本

万一、落丁乱丁の場合は

お取替致します

©Soh Aono 1979

printed in Japan

愚者の夜

1

青白い夜が波のように寄せてはかえしている。障子の外を吹いているのは世界地図にはのっていない幻の国土からの風だ。時間は二人が吐きだす毒のせいかな腫れぼったい。どん・どどん・どん・どどん・どどん・どどん・どどん・どどん・どどん。闇にうがった穴ぼこの底からかすかに太鼓の音がひびき、犀太^{さいた}はもっとよくきこうと試みるだけで穴ぼこに吸いよせられて頭から落ちそうになる。いけないいけないとおもい、のめりこむ身をひきもどそうとするうちに、いつもの映像がみえてくる。――メガホン型とも火山型ともいえる黒い巨大な筒が天にむけて立ち、麓を蟻よりも小さな人間の列が、靴をキュッキュと鳴らせながらやってきて、ひとりふたりと側面の梯子をよじのぼる。そしてさかさまに落ちこむ人は声もなく、凍りついたのか臉も広げた指もつばって、ただ吸いこまれて落ち

てゆく。二度ととまることもなく、おそらく、明日もあさっても来年も暗い広がりの中を落ちてゆく。またひとり、ようやく口のへりまでのぼった者が空を飛ぶようにとびおりた。

天体のどこの片隅にこんな苦しげな広がりがあるのだろう。砂漠や曠野やアンデス山中で仰ぎみる夕暮れのまっさおな闇、あれが宇宙の正門だとすれば、これはかえりみられなくなつてから久しい朽ちはてた裏門にちがいない。うつふして両手を窓の下の壁ぎわまでのぼしていた犀太は、クロールで息を吸うように顔をあげて右目でジニーを盗みみた。健康な彼女の裸体が青白い闇のなかで、だるそうにシーツのうえに打ちあげられていた、彼女がよくつかう言葉でいえば『赤道直下の渚で息をひきとろうとする河馬さんのように』。

犀太の眼は同時にジニーが床の間に飾りつけた銀や錫製のアクセサリーをいちべつした。彼女がアジア・アフリカを旅しながら買いあつめたもので、海亀の卵ほどの大きさの鈴をつらねたネックレスは、闇のむこうから穴をあけてこちら側を見物しているいきものの白目のようである。中央にあるはずの青銅製のガネーシャ像は暗がりにとけこんでいて見えなかった。

ジニーは二階の六畳間を寢室にさだめたとき床の間の利用方法についてためらわなかった。犀太が『うん、うん』とうなずいて眺めていると、目覚まし時計がはいっていた厚紙のケースに黒い布をかぶせて置き、そのうえに手のひらで包める大きな象の顔をしたガネーシャ像を飾った。彼女は旅するとき、このヒンズーの神さまを手提げのなかにいれてもちはこび、ひとところに一週間以上とどまるような場合は机のうえに、あるいは机もない安宿のときは部屋の隅に壇をつくって飾っていた、あくまでも室内装飾として。

「あと二日か、まだキャンセルしてなかったんだね」と犀太は切れていた会話をあらためて開始した。

「もってる切符でかえったほうがいいかもしれないよ、時を浪費してるだけなのかもしれないから」

「なにもおきそうもないわね」

ジニーは低くいい、暗がりを押しあげるようにして腕を顔のうえで交差させた。夏の海辺で中天の太陽から眼をまもるときの動作である。上膊部にはこじつければ南十字星ととれないこともない四つのほくろがあった。犀太には、とがった肘が描く白い峰と稜線が、

彼女の意志の強さをあらわしているようにみえた。

「あたしのためにいい歯医者を探してもくれないし」

低い灰色の林をくぐってきたような声だった。ずるずるのばしにするうちに今日に至ったことをいまさらいってもはじまらなかった。彼はふくらむ沈黙が恐くなって「窓全体にスクリーンをつけたらどうかなあ、まっくろいやつを」と話題をかえた。会話がとぎれる直前に意識し、今朝もくらくらと眼をしばたたきながら考えた、それなりに大切な件ではあるのだが。

「朝の光が強すぎてゆっくりと眠っていられない、昼間っから霞がかかって首のうえに頭がうまくのっかってない感じなんだ。畳の焼けぐあいからしたって夏になったらきつとこの部屋は暑いよ」

ジニーは交差している腕をおでこのほうにずらし眼球だけを横にむけて、隣りで腹ばいになっている犀太をみつめた。

「リノ、あなたの望んでいた生活がこれだったのね、この生活を望んでいたのね？」

「意地でもそうじゃないとはいえないよ。ぼくは冴えてないんだ、人は本心本心ときも胸

のなかにダイヤモンドかプラチナでもかくしているようなことをいう、だけどもはくは、本心とはだるくてやりきれない肉体の重さのことじゃないかと真面目におもうことがあるくらいなんだ」

見栄もはらずに正直になってしまえるのはかんじんの自我が衰弱しているからだとおもった。ふたたび障子をみやってスクリーンを考えた。ちょっとひっぱるとするするあがってゆく、外国の家によくついているやつは相当高価にちがいない。東側に二間、南側に一間半もガラス窓があつてはしよせん無理だ、ところでひと夏でいったい何十ダースのビールを飲むだろう？

スーバー・マーケットに勤務する犀太の兄は家を建てたとき、せめて光だけはふんだんにとりいれようと考えて二階の窓を大きくとった。南側は窓というよりもヴェランダへ通ずるガラス戸である。しかし兄夫婦は建ててまもなく大阪に転勤で、他人に貸すことになった。西にむかつて長い放浪にでていた犀太が八年後アメリカからかえってきたとき、借りていた家族はより大きな借家へとひっこそうとしていた。

これから祖国で生活しようとする外国がえりにとっては幸運だった。七十日おくれで合

流するジニーも諸外国の雑誌でからかわれている家畜小屋のような日本のアパートにおしまれないで喜んでくれるだろう。犀太の兄は権利金や敷金はとらなかったが、『おまえも日本で社会生活を営むのだから家賃はもうぞ。一九七七年の日本はおまえがでていったころとは比較にならないほど物価が高い。この家も八万五千円で貸していた。おまえからはいくらでもいいんだが、そうだな五万円にしよう。そのくらい払えなければいまの日本では成人ではない』といって銀行への振りこみ方法を教えた。それから窓にふれ、『いささか欲ばりすぎた。サラリーマンが無意識に育てている希望があんがいこの大きなガラス窓になってあらわれたのかもしれない』といった。

雨戸をしめると息ぐるしくてたまらないというのがジニーの意見だった。二重瞼の内側の肉は血管が桜色にすけてみえるくらい薄いのに彼女は光の洪水を少しも苦しめない。スクリーンと目かくし。犀太は口のなかでつぶやいたが、いくらいったって生命力のない単語の灰にすぎないと認めざるをえなかった。いったはしから意味を失ってゆく言葉の死骸。これが日常生活であるとは、いかに外国がえりの日本人青年といえども信じたくはない。「しかしジニー、これで本が出版されないことになったら、なんのためにぼくは日本にい

るんだろう。一切がナンセンスだ」

いってから、これぞ満月のようにくっきりと浮かびあがった本心だ、とおもった。だが本をだそうとする生活なんてあるんだろうか、編集者の胸三寸できめられる、いわば判決を待つ生活なんて、とすぐに疑問が湧いてその本心は翳^{かげ}ってしまう。彼は腕をちぢめて力をいれ、イグアナのような姿勢で肩と顔を起こした。

「これは生活じゃない、生活になりそこねている一歩手前の暗闇とぬかるみだよ」

「あたしはアメリカに騙されたのね。バリで別れてから十八カ月ぶりにリノと会ってすごした四週間に。生きいきしていたわ。話すこともたくさんあったし、心もはずんで、ああリノとあたしはつながってるなあって感ずる瞬間が星のようにいっぱいあった。あたしたちは恋人たちというには古くさくなっているけど、恋人どうしのように瞳をみて語りあったわ。いまはあたしが天井をみて、リノは床をみて話す……」

犀太は弱々しく反撥する。「日本ではない国をもちだすのはやめにしよう。現在とは無関係なんだし、旅の日々が素晴らしいのはわかりきってるじゃないか。ぼくは祖国にかえるときめて沈みがちだったけど、まだまだ身の軽さを誇る旅の時間のなかにいた、そして君

の背には規則正しく仕事をしたおかげでヴァカンスの翼が生えていた」

ジニーは両腕を重さにまかせて頭のうえにすべり落とし、無防備な姿勢で、宙をにらんだ。口もととは疲れていた。たてにのびて低くつぶれた乳房は乳首がへこんだままなので火山にみえる。うっすらとついた腹部の脂肪。陽に焼けた肌と白い肌の境界がいまだにくっきりとしている。犀太は再会するたびに彼女の肉体が微妙に期待とくいちがっていたことをおぼえている。犀太よりもサンダルの踵ひとつ低い一六五センチの、撫で肩で腰がふっくらとした裸体像はみつくして網膜に焼きついていっているとおもっているのに、会ってみると痩せすぎているか太りすぎているかなのだった。そして灰色の線が放射状にはいったエメラルド色の瞳がこんなに大きかったかとおどろかさされ、鼻のまわりのそばかすも記憶のなかでは消えてしまいうらしく、会うたびに増殖したように感じた。彼女の顔はおでこに二本の皺がより、小さな鼻は上をむいて唇は厚く、垂らした髪からつきでた耳が目立って美人とはいえなかったが、あたりをまるやかにする魅力があった。

「恋愛でもして燃えて眼をくらまされるようにならなければいけないなあ」と犀太は脈絡のないことをいった。

「あたしたちはどうなるのかしら？」

「もし別れたらということかな？」

ジニーは腕を前のようにもちあげて眼をおおい、とんがった肘を天井にむけた。犀太は傷口のかさぶたがとれるようなほの痒い笑いが内におこるのを抑えられなかった。区役所へいって離婚を申請する一枚の書類を提出するか、あるいは入国管理事務所へいってジニーの日本滞在延長を申請するか、そのどちらかの選択を明日までにしなければいけないというのに。

「どうなったって二人のあいだの引力法則はかわらないだろう。いままでぼくたちは何回別離と再会をくりかえしてきたとおもう？ カルカッタの救世軍ホテルでめぐりあってから今日までの八年間、一年の半分は別々に暮してきたんじゃないかな。計算してみたらきつと面白いよ。もしかしたら三分の二かもしれない。いまさら離婚したからといって二度と顔を合わさなくなるとは信じられない」

「あたしにも一生会えないとは考えられない。でも、オランダにかえったら日本にはもう二度とこないと感じているのよ、あなたがくるの？」

犀太は応えなかった。日本列島からは足の指一本はみだしたくない、たとえ三食ホテル付きの旅行クーポン券に飛行機の切符をそえられても動きはしない。そのことは十回以上ジニーにいつてあった。左方隣人の、皮膚病にかかって耳の毛が抜けた飼い犬コロちゃんが行行人にむかって吠えた。鎖をいっぱいひきずって走りまわっているらしい、金属製の食器とふれあう音が静かな夜を痛める。まもなく右前方二軒とび隣人が新興宗教の祈禱をはじめだろう。ヒエロニムス・ボッシュの絵をおもいださせる声が三十分はつづき、ジニーは「糞！」と小さくオランダ語でいうだろう。犀太は間を置いて深みから言葉を汲みあげた。

「おたがいに燃えあがって眼がくらむようになりたいなあ」

「そうよ恋愛につきものの心のときめきが必要だわ、あなたにもよ。おかしいわね、新しい男と出会い、障害物競走みたいに熱中して目先しか見えなくなっても、遅かれ早かれそれにも終りがきて、ああ時間だけが流れたという、冬の夜明けみたいに醒めたふりだしにもどされる。そんなことわかってるのにやっぱり恋愛してみたい。——ただ時が流れて齡をとってゆくだけね」

「そんなくたびりかけたこというなよ」とジニーの声が地に落ちてしまわないうちにいった。「六十の婆さんが花模様のバンティはいていそいそと男を探す時代だぜ」

「あたしは老女とかわりないのよ」

ジニーは肘の内側でおでこを二度三度と下からこすりそのまま頭のうえに放りなげた。

犀太はオットセイのようににじりよって彼女の右眉に唇をつけ、舌先に軽く力をいれて腕をすべりおり、腋毛を口にふくんで何本にも縋^よった。もし咬ませてくれたならば、もし咬んでくれたならば。そうすれば迷路のどこかにまぎれこんでしまった性の爆薬が発見できないともかぎらない。彼はいいわけがましく考え、負担を除こうとするときの常套手段でおどけた口調をつかう。

「だいたいぼくたちは異常だよ、まるで性愛しない。成功したのは湯船のなかのたった一回だけだもの」

「ペンや鉛筆の先から精液がでつくしちゃったんだわ」

硬さがほぐれて彼の手は白い肌をすべった。おへその窪みは噴火口というよりむしろ干あがった沼である。豊かな恥毛のあいだを滑走し、肉の厚い堂々としたヴァギナにふれた。

しかしユーモアがもたらした効果もここまでで、城門を前にして合言葉を忘れた兵士のようにならうたえ、腕をひっこめるきっかけになる次の言葉を考えるか待つかなければならなかった。じっとしていたら、のびてくるジニーの手が彼の手の甲をおさえて指をコントロールし、『こうやるものよ』といって前戯を指導する、そして彼の意識は確実に凍りつく。

「いいのよ、あたしにも責任はあるから文句はいえないの」と彼女は彼の心理をみすかしているようにしんみりした口調でいった。「でもね、このままじゃいけないわ、道で男をみるときのあたしの眼がいやらしくなってきたてきているみたいだもの」

広がる沈黙の波紋が胸に刻みをつけた。

「つくづくおもうけど、本当に男を愛するのは離れているときだけよ。でなければすれちがう男との一晩だけのおつきあいのなかに辛うじてあるかないか」

三日前にもいったことだった。男の足の匂いやお尻のたるみ。平目のようにぬめりこんでくる舌の厚みや、女の裸体を観察するときの眼の配りよう。性行為を牽引したり後押しするために選ばれる単語の卑猥さ。こんな点がみえて男の人柄が知れたら総毛だってくる